

## ラテン語のmetrical calendarsと古英詩*Menologium* 付 Metrical Calendar of York

唐澤一友

### 1. Latin Metrical Calendarsの伝統の確立と発達

中世の祈祷書には、各祝日の日取りを正しく把握できるよう、暦学 (computus) 関連の文書や図表が付されていることがよくあり、その中にはしばしば教会暦表 (calendar) が含まれている。教会暦表には、一年を十二か月に分割するローマの暦 (ユリウス暦) の枠組みに従い、各月ごとに、どの祝日を何日に祝うべきかがまとめられている。固定祝日の日にちの他にも、各季節の始まる日にち、春分、夏至、秋分、冬至の日にち、移動祝日の可能な限り最も早い日にちおよび可能な限り最も遅い日にち、太陽の位置が黄道十二宮のある宮から次の宮へと移り変わる日にち、閏日の置かれる場所、さらには、幸運な日や不運な日などについての情報も記されていることがある。<sup>1</sup> アングロ・サクソン時代の教会暦表は、断片的に残っているものも含めると、全部で27ある。<sup>2</sup> 11世紀に作られたものが最も多く、18の教会

<sup>1</sup> この他にも、任意の日の月齢や曜日を知る手掛かりとなる記号等、用いるには専門的な知識が必要な情報も、主に記号の形で付されている。この種の教会暦表の使い方については、B. Günzel, ed., *Ælfwine's Prayerbook* (London, British Library, Cotton Titus D. xxvi + xxvii), HBS 108 (London: Boydell, 1993), pp. 16-30 に簡単にまとめられている。また、アングロ・サクソン時代の教会暦表の多くは、F. Wormald, ed., *English Kalendars before A.D. 1100*, HBS 72 (London: Harrison and Sons, 1934) として、エディションが出版されている。

<sup>2</sup> ただし、この数には本稿で扱うような Metrical Calendars は含まれていない。現存するアングロ・サクソン時代の教会暦表の一覧や、各教会暦表についての詳細情報については、R. Rushforth, *Saints in Anglo-Saxon Kalendars before AD 1100*,

暦表がこれに当たる (Rushforth nos. 10-27)。これに次いで、10世紀のものが5つ (nos. 5-9、ただしno. 9は11世紀初頭の作の可能性もある)、9世紀のものが1つ (no. 4)、最初期のものは、8世紀の作で、完全なもの1つ (no. 1、The Calendar of Willibrord<sup>3</sup>) と断片が2つ (nos. 2-3) が残っている。

現存するアングロ・サクソン時代最初期の教会暦表が作られた8世紀初頭から約半世紀後の8世紀後半のイングランドでは、主に教会暦表の中の固定祝日に関する記載を六歩格 (hexameter) を用いて韻文化したmetrical calendarという新たな文学ジャンルが生み出された。本稿で扱うMetrical Calendar of York (以下、MCYと略す) は、<sup>4</sup> 我々の知り得る限り、この文学ジャンルの元祖と言える作品であり、8世紀後半にヨークで作られた

HBS 117 (London: Boydell, 2008) を参照。本稿でアングロ・サクソン時代の教会暦表に言及する際には、Rushforth の分類番号 (1～27) に従う。また、各教会暦表の年代等についても、Rushforth による。

<sup>3</sup> この教会暦表は、その作成に聖ウィリブロード (c. 658-739) が関与したと考えられていることから、The Calendar of Willibrordと呼ばれている。この教会暦表のファクシミリおよびエディションは、H.A. Wilson, ed., *The Calendar of St. Willibrord from MS. Paris Lat. 10837: A Facsimile with Transcription, Introduction, and Notes*, HBS 55 (1918; repr. Woodbridge, 1998) として出版されている。

<sup>4</sup> MCY は、*Martyrologium Poeticum* と呼ばれることもある。かつては Bede (c. 673-735) の作と考えられたこともあり、*Patrologia Latina* (以下、PL と略す) でも Bede の作品とされているが、現在では、成立年代が Bede の死後と推定されており、Bede の作とは考えられていない (MCY で言及される聖人の没年で一番遅いのは Boniface の 754 年で、これは Bede の没年よりも後である)。この作品のエディションには、PL に含まれるもの以外に、J. A. Giles, ed., *Venerabilis Bedae opera quae supersunt omnia*, vol. 1 (London, 1843), pp. 50-53 および A. Wilmart, 'Un témoin anglo-saxon du calendrier métrique d'York,' *Revue Bénédictine* 46 (1934), pp. 41-69 がある。前者ではこの作品は Bede によるものと捉えられている。本稿にもこの作品の原文および邦訳を掲載したが、Wilmart と PL のテキストの主な違いについては、ラテン語原文に付した注を参照。

ものと考えられている。<sup>5</sup> MCYそのものは、2つの写本 (London, British Library, Cotton Vespasian B. vi (Mercia, s. ix<sup>in</sup>), fols. 104r-104v; Cambridge, Trinity College O.2.24 (1128) (s. xii<sup>in</sup>), fols. 88r-89v)<sup>6</sup> によってのみ現代に伝わっているが、この作品はイングランド国内で広く流通したのみならず、9世紀以降、アイルランドや大陸にも伝えられ、伝わった先々で盛んに改変が施され、その結果、地域ごとにその土地独特の特色のある多くのmetrical calendarsが作られた。<sup>7</sup> これにより、metrical calendarという文学ジャンルが確立したと言える。Wandelbert of Prün (813-870)<sup>8</sup>やEugenius Vulgarius (fl. s. x)<sup>9</sup>のmetrical calendarsのように、MCYやそこから派生した作品と直接的にはつながりのない作品も、恐らくこれらの作品の間接的な影響下において作られたものであろう。

MCYが大陸に伝わった9世紀初頭から約1世紀後の10世紀初めには、大陸で改変された作品がイングランドに「逆輸入」され、イングランドにおいてさらに改変が加えられた上で写本に記録されている。<sup>10</sup> これは、この

---

<sup>5</sup> MCYの成立年代・場所については、Wilmartの議論を参照。Lapidgeは、Wilmartの議論に独自の考察を加え、MCYの成立年代を、754-766年の間とし、ヨークにおいて、Alcuinに近い人物によって書かれたものであろうとしている。M. Lapidge, 'A Tenth-Century Metrical Calendar from Ramsey,' *Revue Bénédictine* 94 (1984), pp. 326-69 (pp. 330-32).

<sup>6</sup> 写本の年代等については、Lapidge, 'A Tenth-Century Metrical Calendar from Ramsey,' pp. 327-28に従った。

<sup>7</sup> この作品の大陸における改変の様子を伝える写本については、Lapidge, 'A Tenth-Century Metrical Calendar from Ramsey,' pp. 332-42に詳しい。

<sup>8</sup> この作品のエディションには、E. Dümmer, ed., *Poetae Latini Aevi Carolini*, vol. 2, MHG (Berlin, 1884), pp. 578-602および*Patrologia Latina* 121 (1852), pp. 586-624がある。

<sup>9</sup> この作品のエディションには、P. Meyvaert, 'A Metrical Calendar by Eugenius Vulgarius,' *Analecta Bollandiana* 85 (1966), pp. 349-77がある。

<sup>10</sup> Lapidgeは、この作品の成立年代・場所を、10世紀最初の10年の間のウィンチェスターとしている (Lapidge, 'A Tenth-Century Metrical Calendar from Ramsey,'

作品のエディションを最初に作った人物にちなんで *Metrical Calendar of Hampson* (以下、MCHと略す) と呼ばれ、完全な形では3つの写本に記録されている (もう一つ断片も伝わっている)<sup>11</sup> 以下でも見るように、MCYは全82行で65の祝日を扱った短い作品であるが、一方、改変を重ねたMCHは、一日に一行を割り当て、365日全てを扱っており、大幅に分量が増えている。イングランドの聖人への言及が少ない半面、北フランスとアイルランドの聖人や祝日への言及が多く含まれており、また、全体として、*Féilire Óengusso*<sup>12</sup>のようなアイルランドのcalendar poemと類似していることから、<sup>13</sup> 詩人はイングランドに住む (場合によってはアルフレッド大王の宮廷に仕える) アイルランド人によって作られたものではないかと推測されて

---

p. 346)。一方、McGurkは、成立年代を902年のすぐ後としている (P. McGurk, 'The Metrical Calendar of Hampson: A New Edition,' *Analecta Bollandiana* 104 (1986), pp. 79-125 (p. 84))。

<sup>11</sup> この作品のエディションには、R.T. Hampson, *Medii Ævi Kalendarium or Dates, Charters, and Customs of the Middle Ages with Kalendars from the Tenth to the Fifteenth Century and an Alphabetical Digest of Obsolete Names of Days Forming a Glossary of the Dates of the Middle Ages with Tables and Other Aids for Ascertaining Dates*, vol. 1 (London: Henry Kent Causton, 1841), pp. 397-420、および、P. McGurk, 'The Metrical Calendar of Hampson' がある。完全な形でこの作品を記録する3つの写本は次の通り。London, British Library, Cotton Galba A. xviii (fols. 3r-14v); London, British Library, Cotton Tiberius B. v, vol. 1 (fols. 2r-7v); London, British Library, Cotton Julius A. vi (fols. 3r-8v)。断片については、注25を参照。

<sup>12</sup> W. Stokes, ed., *Féilire Óengusso Céili Dé: The Martyrology of Oengus the Culdee*, HBS 29 (1905; repr. Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 1984)。

<sup>13</sup> アイルランドのcalendar poemsとの関係性や、*Féilire Óengusso*との類似については、J. Hennig, 'Studies in the Literary Tradition of the "Martyrologium Poeticum",' *Proceedings of the Royal Irish Academy* 56 (1953-54), pp. 197-226 や、J. Hennig, 'The Irish Counterparts of the Anglo-Saxon *Menologium*,' *Mediaeval Studies* 14 (1952), pp. 98-106を参照。

いる。<sup>14</sup>

10世紀終わり頃には、MCYとMCHの両方を利用しながら、Ramseyで新たなmetrical calendarが作られ、写本に記録されている。これは、Metrical Calendar of Ramsey（以下、MCRと略す）と呼ばれ、128行から成り、Oxford, St John's College 17 (fols16r-21v) によってのみ現代に伝えられている。<sup>15</sup> MCRは、アングロ・サクソン時代が終わりを迎えた後の時代にも伝えられ、12世紀初頭頃のWinchcombeにおいて、これを改変したMetrical Calendar of Winchcombe (MCWと略す) が作られている。これは、London, British Library, Cotton Tiberius E. iv (fols. 35r-40v) に保存されている教会暦表の中に組み込まれた形で残っている。<sup>16</sup> さらに、13世紀前半の写本 London, British Library, Cotton Julius D. vii (fols. 35v-41r) に記録された教会暦表の中にも、MCRに基づくと思われる詩行が所々組み込まれている。

以上のように、8世紀後半のイングランド（ヨーク）に始まったラテン語によるmetrical calendarの伝統は、9世紀以降、大陸やアイルランドに伝わり、各地で改変が繰り返され、そうして出来たものが10世紀初頭のイングランドに「逆輸入」され、それがさらにイングランドでは、少なくとも

---

<sup>14</sup> 北フランスやアイルランドとのつながりについては、Bishop が最初に指摘した (E. Bishop, *Liturgica Historica: Papers on the Liturgy and Religious Life of the Western Church* (Oxford: Clarendon Press, 1918), pp. 253-56)。Lapidge や McGurk も Bishop に言及し、基本的に同様の考えを示している (Lapidge, 'A Tenth-Century Metrical Calendar from Ramsey,' pp. 347-48; McGurk, 'The Metrical Calendar of Hampson,' pp. 83-84)。

<sup>15</sup> この作品のエディションは、Lapidge, 'A Tenth-Century Metrical Calendar from Ramsey' に含まれる。Lapidge はこの中で、MCR が作られたのは、Ramsey において、10世紀最後の10年の間、恐らく992-993年であるとしている (pp. 352 and 358)。

<sup>16</sup> エディションは、Lapidge, 'A Tenth-Century Metrical Calendar from Ramsey' に含まれる。この作品の成立過程や成立年代等についても同論文を参照。

も13世紀まで繰り返し改変されながら受け継がれた。MCY以来、metrical calendarはラテン語で書かれ、韻律は六歩格を用いるというのが伝統であるが、特にアイルランドでは、この伝統の影響下に、土着の古アイルランド語でも、*Félire Óengusso*のような作品が書き残されている。<sup>17</sup> 一方、古英詩にも教会暦を扱った*Menologium*という作品が残されており、<sup>18</sup> これもまた、土着語によるmetrical calendarのもう一つの例としてしばしば捉えられてきた。次節では、MCYをはじめとするラテン語のmetrical calendarsと*Menologium*とを比較しながら、両者の関係性について考察する。

## 2. Latin Metrical Calendarsの伝統と古英詩*Menologium*

ラテン語のmetrical calendarsは、*Menologium*と関連する研究の中で、しばしば類似作品として言及されてきた。例えば、Imelmannが編集した*Menologium*のエディションの解説の中の‘Quellen des Menologiums’という節においては、Wandalbert of Prünのmetrical calendarのことが触れられている。<sup>19</sup> Anglo-Saxon Poetic Records第6巻の解説においては、Dobbieも、類似した作品として、Wandalbert of Prünの作品、MCY、および*Félire Óengusso*に言及しているが、中でも特にMCYと*Menologium*とは、作品の規模までもが類似していると指摘している。<sup>20</sup> Greesonも、*Menologium*のエディションの解説において、この作品をラテン語や古アイルランド語の

<sup>17</sup> この問題については、注13を参照。古アイルランド語のcalendar poemsについては、六歩格ではなく、また別の詩形が用いられる。

<sup>18</sup> *Menologium*は、*Maxims II*とともに、*Anglo-Saxon Chronicle* (C-text) に対する序として、11世紀中頃の写本、London, British Library, Cotton Tiberius B. iによってのみ現代に伝えられている。エディションは、E.V.K. Dobbie, ed., *The Anglo-Saxon Minor Poems*, ASPR 6 (New York: Columbia University Press, 1942) に含まれる。

<sup>19</sup> R. Imelmann, ed., *Das altenglische Menologium* (Berlin: E. Ebering, 1902), pp. 40-41.

<sup>20</sup> Dobbie, ed., *Anglo-Saxon Minor Poems*, p. lxi.

metrical calendarsの伝統の延長線上にある作品としてかなり詳しく論じている。<sup>21</sup> BakerやLapidgeは、*Menologium*とラテン語のmetrical calendarsとの関連性それ自体については簡単に触れるだけであまり詳しいことは論じていないものの、両者の密接な関係性を示唆するかのよう、伝統的な*Menologium*というタイトルの使用を避け、代わりに Old English Metrical Calendarというタイトルを一貫して用いている。<sup>22</sup> Hartにいたっては、‘the menologist translates and epitomises the erudite metrical Latin calendar of his house’<sup>23</sup>とし、*Menologium*をmetrical calendarから直接派生した作品としている。

これらの研究により指摘されているように、教会暦を扱った詩作品として、ラテン語や古アイルランド語のmetrical calendarsと*Menologium*には、確かに類似した側面がある。しかし、その類似がどの程度のものなのかということについては、あまり詳しく論じられてこなかったように思われる。上記のGreesonやHartのように、*Menologium*がmetrical calendarsの伝統と直接的に関連するものと考える人もいるが、これが果たしてどの程度妥当かということも、あまり詳しく検証されてこなかった。したがってここでは、この問題について、特にDobbieが指摘するように作品の規模という意味でも

<sup>21</sup> Hoyt St. Clair Greeson, Jr., ‘Two Old English Observance Poems: *Seasons for Fasting* and *The Menologium* – An Edition,’ diss. U of Oregon, 1970, pp. 87-110.

<sup>22</sup> P. Baker, ‘Metrical Calendar, OE,’ in M. Lapidge, et al. eds., *The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England* (Oxford: Blackwell, 1999), p. 312、および、M. Lapidge, ‘The Saintry Life in Anglo-Saxon England,’ in M. Godden and M. Lapidge, eds., *The Cambridge Companion to Old English Literature* (Cambridge: CUP, 1991), pp. 243-63 を参照。

<sup>23</sup> C. Hart, ‘The Old English Verse Menologium,’ in his *Learning and Culture in Late Anglo-Saxon England and the Influence of Ramsey Abbey on the Major English Monastic Schools: A Survey of the Development of Mathematical, Medical, and Scientific Studies, in England before the Norman Conquest*, vol. 2, book 1 (Lewiston: Edwin Mellen, 2003), pp. 177-215 (p. 194) .

最も似通っているMCYと*Menologium*の比較を通じて考えてみることにする。

ラテン語のmetrical calendarsは教会暦表や殉教録に列挙されている祝日とその日付についての情報を韻文の形で抜粋したものであり、<sup>24</sup> 機能としては教会暦表や殉教録の記載と基本的に変わらない。実際、前節でも触れたように、metrical calendarsはしばしば教会暦表の中に組み込まれた形で記録されている。例えば、MCH、MCR、MCW、それに13世紀のCotton Julius D. viiに断片的に残るものがこの形態で記録されている。<sup>25</sup> 一方、*Menologium*は教会暦表や殉教録の抜粋とは言い難く、これらとは基本的な機能も異なり、そのため、これを教会暦表に組み込むことも不可能である。別の機会に論じたように、<sup>26</sup> *Menologium*においては、至点・分点が一年を四分割する最も大きな枠組みとして導入されており、これに加え、四季の始まりと各月の始まりも言及される。(計算により算出することも出来るが)各祝日の日付は示されず、それぞれ前後の祝日までの日数によってその位置が示されるに留まっている。このような特徴を考えると、*Menologium*は、教会暦表のようにローマの暦の枠組みの中で祝日の具体的な日付を示すためのものというよりはむしろ、至点・分点、四季の始まり、および各月の始

---

<sup>24</sup> 殉教録については、特に *Martyrologium Hieronimianum* (あるいはそこから派生したもの) との関連が深いようである。これについては、例えば、Lapidge, 'A Tenth-Century Metrical Calendar from Ramsey,' pp. 344-45 and 364 を参照。

<sup>25</sup> Hampson, *Medii Aevi Kalendarium* においては、MCH がこの形態のままエディションにされている。また、Oxford, Bodleian Library, Junius 27 (fols. 2r-7v) には、MCH からの 27 行が断片的に組み込まれた教会暦表が記録されているが、これについても、Dumville が、この形態のままエディションにしている (D.N. Dumville, 'The Kalendar of the Junius Psalter,' in his *Liturgy and the Ecclesiastical History of Late Anglo-Saxon England*, Studies in Anglo-Saxon History 5 (Woodbridge: Boydell, 1992), pp. 1-38)。

<sup>26</sup> K. Karasawa, 'The Structure of the *Menologium* and Its Computistical Background,' *Studies in English Literature* 84 (2007), pp. 123-41.

まりによって示される一年のまた別の枠組みの中において、<sup>27</sup> そしてまた、隣接する祝日との関係において、各祝日がどこに位置しているかということを示そうとしたものと考えられる。アングロ・サクソン時代には、このような形で祝日の位置を把握することは、ローマの暦に従った日付記載法を知ると同じぐらい重要であったものと考えられる。というのも、当時は、日付を記す際に、重要な祝日あるいは至点・分点、四季の始まりを利用することが、ローマ式の日付記載法と同じぐらいよくあったからである。<sup>28</sup> 教会暦表、殉教録、ラテン語のmetrical calendarsなどは、ローマ式日付記載法を利用して祝日の日付を記録したものであるのに対し、*Menologium*は、その構造から考えて、ここで見たもう一方の日付記載法と密接に関わる作品、恐

---

27 至点・分点、四季の始まりについては、アングロ・サクソン時代の暦学の入門書にしばしば解説が見られる。至点・分点の日付、四季の始まりの日付、および各季節の日数は、教会暦表にも記載されていることが多い。各季節は90~92日とされ、それぞれの丁度中間に至点・分点が位置する。(古い暦における)冬至に当たる12月25日に始まる教会暦においては、*Menologium*においてと同様、至点・分点により一年が四分割され、各至点から分点までの中間に季節の始まりがくるといふ捉え方がなされる。これに従うと、一年は、45~47日から成る「至点・分点~四季の始まり」のユニット8つから成ると捉えられ、一年を28~31日から成る12の月に分割するローマの暦と並び、これが一年のもう一つの構造として知られていた。このような一年の構造をまとめた当時の暦学の入門書としては、例えば、Bede, *De temporum ratione* 30 および 35 がある (この作品のエディションは、C. Jones, ed., *Bedae opera de temporibus* (Cambridge, MA.: Medieval Academy of America, 1943) に含まれる)。

28 このことを反映して、一年の始まる日付もローマ式の1月1日と、教会暦の始まりであり、(古い暦に従った場合の)冬至でもある12月25日と、二通りがあった。例えば、ローマの暦に従う教会暦表は1月1日を一年の始まりとするが、殉教録や祈祷書等においては12月25日を始まりとする場合が多い。アングロ・サクソン時代の一年の始まりについては、K. Harrison, 'The Beginning of the Year in England c. 500-900', *Anglo-Saxon England* 2 (1973), 51-70や、M.R. Godden, 'New Year's Day in Late Anglo-Saxon England', *Notes and Queries* n.s. 39 (1992), 148-50を参照。

らくこの日付記載法の理解の仕方をまとめたものであると考えられる。<sup>29</sup> そう考えると、metrical calendarsと*Menologium*とは、それぞれ別々の機能と用途を持ち、根本的に性質の異なる作品であると言えるように思われる。

上述のように、metrical calendarsは、教会暦表や殉教録における祝日とその日付に関する記載を（多少の言葉を付け加えながら）韻文化したものと見える。したがって、逆に言えば、metrical calendarsに対応する散文版は教会暦表や殉教録の該当箇所の記載であると言える。一方、上述のような性質上の違いから、*Menologium*を散文化しても（そして、たとえ詩的・装飾的な内容を全て取り除いたとしても）教会暦表等の記載にはならない。実際、*Menologium*に対応する散文作品としては、散文の*Menologium*が知られており、これは教会暦表とは大きく異なる性質を示している。<sup>30</sup> 散文の*Menologium*は、韻文版に比べ内容が大幅に単純化されているものの、基本構造、機能、用途は同じである。<sup>31</sup> ただし、韻文版とは異なり、各月の始まりへの言及が一切なく、この点においてローマの暦やそれに基づく教会暦表とはより遠い関係にあると言える。このように、metrical calendarsと*Menologium*とは、いずれも祝日を扱った韻文作品という共通点はあるものの、これらに対応する散文作品が何かということを考えてみると、両者の性

---

<sup>29</sup> *Menologium*の性質や用途について、より詳しくは、K. Karasawa, 'The Structure of *Menologium*,' および K. Karasawa, 'The Prose and the Verse *Menologium* in the Tradition of Elementary Computistical Education in Late Anglo-Saxon England,' in L.S. Chardonnes and B. Carella, eds., *Secular Learning in Anglo-Saxon England: Exploring the Vernacular*, Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik 69 (Amsterdam: Rodopi, 2012), pp. 119-43 (forthcoming) を参照。

<sup>30</sup> この作品のエディションとしては、H. Henel, *Studien zum altenglischen Computus*, Beiträge zur englischen Philologie 26 (Leipzig: Bernhard Tauchnitz, 1934), pp. がある。

<sup>31</sup> 韻文および散文の*Menologium*の性質や関係性については、K. Karasawa, 'The Prose and the Verse *Menologium*' を参照。

質の違いが顕著になる。

*Menologium*とmetrical calendars（および教会暦表）との性質の違いは、これらの作品で言及される祝日を比較してみるによりさらに顕著になる。Dobbieも指摘しているように、作品の規模としては、最初期に作られたMCYが*Menologium*と最も近いと言えることから、ここでは特にMCYと韻文の*Menologium*（VM）および散文の*Menologium*（PM）について、作品中で言及される祝日を比較してみることにする（MCYについては、Wilmart、VMについてはDobbie、PMについてはHenelのテキストに従う）。以下の表は、MCY、VM、PMのそれぞれにおいて言及される祝日をまとめたものである。各作品に対するコラムに○や●が付いている場合、その作品中に該当する祝日が言及されているということを示す。○/●が付いていない祝日については、その作品中には言及されないということである。○はアングロ・サクソン時代の教会暦表においてしばしば特に重要な祝日として印の付けられている祝日、<sup>32</sup> ●はそれ以外の祝日であることを表す。また、\*が付された祝日は、アングロ・サクソン人の聖人あるいはイングランドで活躍した聖人の祝日である。

---

32 アングロ・サクソン時代の教会暦表において、特に重要な祝日として印のつけられたものは全てこの表中に言及されている。ここに含まれない Edward the Martyr (3/18) と Dunstan (5/19) の祝日も、11世紀以降の教会暦表においては特に重要な祝日としてしばしば印がつけられているが、いずれの聖人も、MCYの成立した時代にはまだ存在すらしていなかった。また、これらの祝日は11世紀になってから、法令によりその遵守が義務付けられたもので、*Menologium*が成立した10世紀末にはまだ重要な祝日とはされていなかった。そのため、MCY、VM、PMのいずれにもこれらの祝日に対する言及はなく、この表にも含まれてない。アングロ・サクソン時代の教会暦表において印のつけられた重要な祝日に関する詳細については、Karasawa, 'The Prose and the Verse *Menologium*,' pp. 132-40を参照。

祝日（日付）	MCY	VM	PM
Circumcision (1/1)	○	○	
Epiphany (1/6)	○	○	
Paul the Hermit (1/10)	●		
Anthony the Great (1/17)	●		
Sebastian (1/20)	●		
Agnes (1/21)	●		
Anastasius of Persia (1/22)	●		
Polycarp (2/1)	●		
Purification (2/2)	○	○	○
Agatha of Sicily (2/5)	●		
Valentine (2/14)	●		
Juliana (2/16)	●		
Matthias (2/24)	○	○	○
Gregory (3/12)	○	○	○
Cuthbert (3/20)	○*		○*
Benedict (3/21)	○	○	○
Annunciation (3/25)	○	○	○
George (4/23)	●		
Ecgberht of Ripon (4/24)	●*		
Wilfrid I of York (4/24)	●*		
Major Rogation (4/25) <sup>33</sup>		●	●

33 Major Rogation は、アングロ・サクソン時代の教会暦表においては、祝日というよりはむしろ暦学関連の記載項目として扱われていることが多い。これは、この日が復活祭の可能な限りもっとも遅い日に当たることと関係しているのかもしれない。古英語の文献においては、Major Rogation のことはあまり言及されず、また、アングロ・サクソン時代のラテン語の文献でも、Major Rogation を表す *Litania major* という句がしばしば *Minor Rogations* について使われており、祝日としては *Minor Rogations* に比べ、大分重要度の劣るものだったようである。それにもかかわらず、VM と PM で共通してこの祝日への言及があるのは、この両者の関係性の緊密さを示す一つの手掛かりとなるように思われる。アングロ・サクソン時代の文献における Major Rogation の扱いについては、J. Bazire and J.E. Cross, eds., *Eleven Old English Rogationtide Homilies*, King's College London Medieval Studied 4 (1982; repr. London: King's College London, 1989), pp. xv-xvii を参照。

Wilfrid II of York (4/29)	● *		
Philip and James (5/1)	○	○	○
Invention of the Cross (5/3)		○	○
Pancras (5/12)	●		
Mark the Evangelist (5/18)	●		
Augustine of Canterbury (5/26)		○ *	○ *
Tatberht of Ripon (6/5)	● *		
Boniface (6/5)	● *		
Barnabas (6/10) <sup>34</sup>	●		
Gervasius and Protasius (6/19)	●		
John the Baptist (6/24)	○	○	○
John and Paul (6/26)	●		
Peter and Paul (6/29)	○	○	
Peter (6/29) <sup>35</sup>			●
Paul (6/30)			○
James the Great (7/25)	○	○	○
Abdon and Sennen (7/30)	●		
Lammas Day (8/1) <sup>36</sup>		● *	● *
Pope Sixtus II (8/6)	●		
Lawrence (8/10)	○	○	○
Assumption (8/15)	○	○	○
Bartholomew (8/25)	○	○	○
Decollation of John the Baptist (8/29)	○	○	○
Nativity of Mary (9/8)	○	○	○

34 アングロ・サクソン時代の教会暦表においてもそうであるように、Barnabasの祝日は、一般には6月11日とされるが、Metrical Calendar of Yorkでは6月10日 (quadris... idibus) とされており、ここではそれに従った。

35 St PeterとSt Paulについては、共に6月29日を祝日とするという伝統と並行して、St Peterを6月29日、St Paulを30日とする伝統もあり、MCYやVMは前者、PMは後者の伝統に従っている。後者の伝統においては、6月30日のSt Paulの祝日のみが重要な祝日とされることが多い。

36 Lammasは民間で行われる収穫祭のようなもので、典礼とは直接関係しないため、教会暦表、殉教録、祈祷書等には含まれない。

Cornelius and Cyprian (9/14)	●		
Euphemia (9/16)	●		
Matthew the Apostle (9/21)	○	○	○
Maurice (9/22)	●		
Cosmas and Damian (9/27)	●		
Michael the Archangel (9/29)	○	○	○
Jerome (9/30)	●		
Bosa of York (10/2)	● *		
Two Ewalds (10/3)	● *		
Paulinus of York (10/10)	● *		
Luke the Evangelist (10/18)	●		
Simon and Jude (10/28)	○	○	○
All Saints' Day (11/1)	○	○	○
Martin (11/11)	○	○	○
Thecla (11/17)	●		
Cecilia (11/22)	●		
Clement (11/23)	○	○	○
Chrysogonus (11/24)	●		
Andrew (11/30)	○	○	○
Ignatius of Antioch (12/20)	●		
Thomas (12/21)	○	○	○
Christmas (12/25)	○	○	○
Stephen (12/26)	○		
John the Evangelist (12/27)	○		
Holy Innocents' Day (12/28)	○		
Pope Sylvester I (12/31)	●		
合計	65	29	29

この表を一見してすぐに分かることは、MCYはVMやPMに比べ●が非常に多いということである。ここにはMCY（ひいてはmetrical calendar一般）の性質が顕著に反映されている。MCYには、アングロ・サクソン時代のイングランドで特に重要とされた祝日がほとんど全て言及されているが（Invention of the CrossとSt Augustine of Canterbury以外<sup>37</sup>）、それに加えて、重要度において劣る祝日も多く言及されており、これらが全体の半数以上を占めている（65の祝日のうち36）。前節で見たように、metrical calendarsは、伝わった各地でその土地独自の改変が繰り返され、結果として非常に地域色豊かなものである。そのため、どのような祝日が多く含まれているかということを詳しく研究することにより、特定のmetrical calendarがどこで作られたものなのか、どこからどのような経路で伝わったものかとなっているのかということもかなりの程度割り出すことが出来るのである。<sup>38</sup> 上表を見ると、MCYには、特に、重要度の劣る祝日を中心に、\*の付いた祝日が比較的多く含まれているが（全体の約14%、●の約22%）、\*の付いた重要度の劣る祝日に話を限れば、ウェセックス出身のBonifaceの祝日を除くと他は全てNorthumbria（主にYork）の聖人の祝日であり、地域色豊かという特徴は、metrical calendarの元祖であるMCY以来、このジャンルの作品に共通してみられるものであるということが分かる。これは、各地で編纂された教会暦表（および殉教録）にも同様に認められる特徴であり、この点においてもmetrical calendarsは教会暦表と同じ性質を示していると言える。

これに対し、VMとPMにおいては、当時重要とされていた祝日への言及（○）がほとんどで、重要度の劣る祝日への言及（●）は非常に少ない。ま

<sup>37</sup> MCY が作られた8世紀後半と、多くの教会暦表が残る10世紀以降とで、重要な祝日に多少の違いがあった可能性もあるが、8世紀の教会暦表には重要な祝日の印がつけられたものがないので、詳細は不明。

<sup>38</sup> 既に言及したWilmart, Lapidge, McGurkらのmetrical calendarsに関する研究には、いずれもこの種の議論が多く含まれている。

た、MCYと比べ、VMやPMでは、重要な祝日で言及されていないものも多い（MCYの2に対し、VMは4、PMは5）。特にMCYには言及される12月26日～28日の3つの重要な祝日がVMとVPには言及されないという共通した特徴が認められる。<sup>39</sup> 重要な祝日も全ては扱われない半面、VMとPMでは（MCYでは言及のない<sup>40</sup>）至点・分点および四季の始まり（VMではさらに各月の始まり）が、極めて厳密に、全て言及されており、ここにもmetrical calendarsとの力点の置き方の違いが顕著に表れている。<sup>41</sup> 重要度の劣る祝日の扱いについても、VMとPMはほぼ一致しており、いずれもMajor RogationとLammas Dayが言及される半面、それ以外のものについては事実上言及がなく、重要度の劣る祝日への言及の多いMCYとは全く共通点がない。<sup>42</sup> Major RogationとLammas Dayは、共に民間で年中行事的な祭りの行われる日であることから、<sup>43</sup> VMおよびPMでこれらが言及される

---

<sup>39</sup> 一方、1月1日と6日の祝日については、VMにのみ言及があり、PMにはこれが欠けている。この違いは、恐らくVMに特有の構造に由来するものと考えられる。VMは恐らくPMをモデルにして作られたものであるが、韻文版を作る際に各月の初日に言及するという新たな枠組みが導入され、そのため、VMとPMとは一年の枠組みの捉え方に多少の違いがある。それに伴って、VMでは、PMには含まれない祝日等がいくつか言及されている。この問題については、Karasawa, 'The Prose and the Verse *Menologium*,' pp. 132-43を参照。

<sup>40</sup> ただし、MCYにおいても、一日に当たる祝日が言及される際には、必然的に月の初めの日（kalendas）が言及される。1、2、5、11月がこれに当たる。

<sup>41</sup> MCHには、至点・分点や四季の始まりへの言及が含まれているが、これは、教会暦表を忠実に写す形で365日全てを扱ったことに由来するもので、VMやPMの場合とは大分異なる性質のものと考えられる。

<sup>42</sup> ただし、PL版のMCYには、Major Rogationが言及される。これについては、Appendixに掲載したMCYのラテン語原文およびその邦訳の第23行に付した注を参照。

<sup>43</sup> F.X. Weiser, *Handbook of Christian Feasts and Customs: The Year of the Lord in Liturgy and Folklore* (1952; repr. New York: Harcourt, Brace and Co., 1954), pp. 40-41; E.O. James, *Seasonal Feasts and Festivals* (London: Thames and Hudson, 1961), pp. 168-69.

のも、典礼との関連というよりはむしろ、至点・分点や四季の始まりへの言及に準ずる、季節の目立った行事としてであると考えられそうである（実際、特にLammas Dayについては、教会暦表や祈祷書等には一切言及されない）。そう考えると、VMとPMでは、重要度の劣る祝日は（PMにおけるSt Peterの祝日（6/29）を除けば<sup>44</sup>）事実上全く扱われていないということになり、この点においてMCYをはじめとするmetrical calendarsとは顕著に異なる特徴を示している。

重要度の劣る祝日は、各地において独自の改変が繰り返されながら形成されたmetrical calendarの伝統とは切っても切れないものであると言える。つまり、上述のように、最初期の作にして、最も簡潔なMCYにおいても既に地方色を示す祝日が少なからず含まれているが、改変を通じて各地の典礼等の習慣に基づいた祝日が付加されることにより、この傾向は一層強まり、MCHのように、365日全てを扱った作品ではこれが最高潮に達したと言える。このように、metrical calendarは（教会暦表の場合と同様）、その用途や性質ゆえに、地域ごとの独自性を発達させざるを得ず、MCYの場合で実証されているように、一つの原型から、無数の亜種が生まれるという性質を持つ文学ジャンルであると言える。その意味で、metrical calendarというジャンルには、個別化・地域化が付きものであり、それとは逆の一般化・普遍化とは無縁であると言える。教会暦表は一つとして同じものがなく、また、広く一般に最重要と認識される祝日しか記載されていない教会暦表が存在しないと同様、metrical calendarの伝統においては、地域色を示す、重要度の劣る祝日が全く扱われない作品は考えられないのである。

一方、この点において、*Menologium*はmetrical calendarsとは全く逆の性質を示していると言える。つまり、*Menologium*には、広く一般に重要とされる祝日、および至点・分点等、一年の枠組みとして最重要の日しか扱われておらず、その意味で、教会暦や一年の枠組みのうち、最も一般的・普遍的

---

<sup>44</sup> この祝日の位置付けについては、注35を参照。

な部分だけがまとめられているのである（また、そもそも一年の枠組みに関する情報は、それ自体がmetrical calendarの伝統には属さないものである）。限りなく個別化、地域化していくmetrical calendarsの伝統の延長線上に、*Menologium*のような、基礎的で一般的な知識をまとめることに終始した作品が生まれるとは考えにくい。したがって、文学の系統という観点からも、両者の間に直接的なつながりはないと考えるのが妥当なように思われる。

### 3. 結論

metrical calendarsと*Menologium*とは、作品中で扱われる題材が似通っていることから、しばしば同じ文学伝統のもとに発達した類似作品として捉えられてきた。しかし、作品の用途や性質という観点からも、文学ジャンルの系統という観点からも、両者には重なるところが少なく、両者の間に直接的な関係を見出すことは難しい。metrical calendarは、祝日を日付順に並べるということ以外、全体としてのまとまりは希薄で、個々ばらばらな情報を羅列しただけの作品であり、そのため、地域ごとの事情に合わせて自由に改変が繰り返された。これに対し、*Menologium*は、祝日や暦について、「イングランド」というかなり大まかなくりの地域色はあるものの<sup>45)</sup> その最も基礎的で一般的・普遍的な情報を、包括的な形で整理したものである。metrical calendarsとは異なり、全体が至点・分点や四季の始まり等を軸としたはっきりした構造の上に成り立っているのも、言及されるのがほぼ重要

---

45 イングランドの言語である古英語で書かれているということに加え、イングランドに独特なLammasへの言及が含まれるという点においても、「イングランド」という地方色が感じられると言える。また、作品中にしばしばBrytenという言葉が使われ、作品の最後には、この詩で言及される祝日が、アングロ・サクソンの王の下で遵守されるべきものであるとも述べられている。これらはいずれも、この詩がイングランドにおける祝日や暦を念頭に作られたものであるということを示すと同時に、metrical calendarの場合のように、例えば、ノーサンブリアだとかヨークだとかというような、より限定された地域のことは意識されていないということを示すものでもあると言える。

な祝日のみに限られているのも、このような作品の用途・性質をよく反映したものと言えるだろう。以上のような考察から、metrical calendarsと*Menologium*との類似はごく表面的なものであり、本質的には全く別物であると捉えるのが妥当であるように思われる。

## Appendix

### Metrical Calendar of York (ラテン語原文)

以下は、本稿で扱った Metrical Calendar of York のラテン語原文である。以下のテキストは Wilmart のエディションに基本的に従ったが、Wilmart のテキストは、*PL* 版と異なるところが少なからずあるので、特に大きく異なる箇所については、注を付し違いを指摘した。解釈と関連する問題については、邦訳に付した注の中で扱った。

Prima dies Iani est qua circumciditur agnus.  
 Octavas idus colitur theophania Christi,  
 Deserti quartas primus capit accola Paulus.  
 Sex decimas Antonius obtinet aequē<sup>1</sup> kalendas.  
 Tres decimas Sebastianus tenuisse refertur. 5  
 Bis senas meritis mundo fulgentibus Agnes,  
 Martirio undecimas et Anastasius memoratur<sup>2,3</sup>  
 Prima dies Februi est iam qua patitur Policarpus,  
 Et quartas nonas Christus templo offerebatur.

---

<sup>1</sup> *PL* atque

<sup>2</sup> *PL* memorantur

<sup>3</sup> *PL* では、これに以下の一行が続く。Octavas merito gaudet Conversio Pauli.

## Appendix

### Metrical Calendar of York (邦訳)

以下は、左頁に掲載されたラテン語原文の日本語訳である。直訳調になっている所も多いため、内容理解の上で必要と思われる場合には、注をつけて解説を加えた。また、訳文中の括弧に入った言葉は、理解を助けるために訳者が加えた言葉である。日付については、原文ではローマ式の日付記載法が用いられているが、訳文では現代風に、「何月何日」の形で示した。一方、人名は原文に従いラテン語風のものを採用した。訳文に付した行数は目安程度のものであり、原文と訳文とが一行ずつ対応しているとは必ずしも限らない。

一月一日は子羊（キリスト）が割礼を受けた日。

六日にはキリストの顕現が祝われる。

同様に、荒野に最初に住んだパウルスは十日を（祝日として）持つ。

そして、アントニウスは十七日を（祝日として）占める。

セバステリアヌスは二十日を（祝日として）手にしたという。 5

二十一日には、世にも輝かしき功績故にアグネスに人々の（祈りが捧げられ）、

また、二十二日には、殉教故に、アナスタシウスに祈りが捧げられる。<sup>1</sup>

二月一日はポリカルプス殉教の日。

二日にはキリストが神殿に捧げられた。<sup>2</sup>

---

<sup>1</sup> *PL* ではこの後に、「二十五日は、正当にも、パウルスの改宗の日」という一行が続く。

<sup>2</sup> 聖マリアの清め（*The Purification of the Virgin Mary*）の祝日ことが述べられている。この一節は、「ルカによる福音書」2.22 の「さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に捧げるため、エルサレ

Nonarumque diem festum celebramus Agathae, 10  
 Atque Valentini sedenis sorte<sup>4</sup> kalendis.  
 Sic Iuliana et bis septenas ornat honore,<sup>5</sup>  
 Ac senas meriti Mathias uirtute dicabat.  
 Hinc idus Martis quartas Gregorius aurat<sup>6,7</sup>  
 Cuthbertus denas tenuit ternasque kalendas. 15  
 Bis senis sanctus post quem sequitur Benedictus,  
 Octauis merito gaudet conceptio Christi.<sup>8</sup>  
 Atque Georgius hinc euectus ad astra uolauit,  
 Carnifices nonis Maiæ uincente kalendis.  
 Ecgberhtus digna uirtutum laude choruscus 20  
 Astriferum octauis ueneranter scandit Olympum.  
 Quoque die praesul penetrauit Uilfridus alma,  
 Angelico gaudens uectus trans culmina coetu.<sup>9</sup>

---

<sup>4</sup> *PL* forte

<sup>5</sup> *PL* ではこの後に次の一行が続く。Et Cephas merito octauis tenuisse cathedram,

<sup>6</sup> *PL* ornat

<sup>7</sup> *PL* では、この後に以下の行が続く。Doctor Apostolicus, sanctorum lumen, et astrum. … (*Deest versus.*) … Patricius Domini servus conscendit ad aulam,

<sup>8</sup> *PL* では、この次に次の一行が続く。Carnifices nonis Maiæ vincente Kalendis. この行は、Wilmart 版では 19 行目に来る。

<sup>9</sup> *PL* では、この行とそれに続く 3 行は以下のようにになっている。Angelico uectus cœtu trans culmina cœli: / Septenis major mundo Lætania claret. / Ecclesiae quintis Dedicatio alma colenda, / Sanctis et Christo ciet æquam in sæcula laudem.

五日は、我らがアガサの祝日を祝う日。 10  
 そして、十四日は、定めにより、ヴァレンティヌスの（祝日を祝う日）。  
 そして、ジュリアナが十六日を榮譽で飾っているように、<sup>3</sup>  
 マティアスも二十四日をその功績故に特別な日とした。  
 これ故、グレゴリウスは三月十二日を黄金で飾る。<sup>4</sup>  
 クスベルトゥスは二十日を（祝日として）手にした。 15  
 彼の後、二十一日には聖ベネディクトゥスが続き、  
 二十五日は、当然ながら、キリストの受胎の日。<sup>5</sup>  
 ここにおいて、悪党どもを打ち負かし、ゲオルギウスは  
 四月二十三日に天の高みへ急ぎ飛び立った。  
 エッジベルフトゥスは、その英雄的な行いに相応しい榮譽で煌めきつつ、20  
 二十四日に、謹んで、星多きオリュンポス山に登った。<sup>6</sup>  
 同じ日に、司教ウィルフリドゥスは恵みに達し、<sup>7</sup>  
 天使の群れにより、喜びの裡に、天頂の彼方へと運ばれた。<sup>8</sup>

---

ムに連れて行った」(新共同訳)という言葉が踏まえたもの。*Menologium* (21b-22)  
 でも聖マリアの清めの祝日については、マリアがキリストを神殿に捧げた日とさ  
 れている。

<sup>3</sup> *PL* ではこの後に、「そして、正当にも、二十二日には、ケファスが（司教の）  
 椅子を手に入れた」という一行が続く。ケファスとは聖パウロのこと。

<sup>4</sup> *PL* ではこの後に、「アポストリクス師は、聖人たちの光にして星…（一行抜け）  
 …主の僕パトリキウスは（天の）王宮へ昇った」という言葉が続く。

<sup>5</sup> 受胎告知のことが述べられており、お告げの祝日（*Adnuntiatio sancte Marie*）  
 に言及したもの。

<sup>6</sup> *Olympus* は、文字通りの「オリュンポス山」という意味から転じて、「(神々の  
 住む)天」の意でも用いられることから、「オリュンポス山に登る」とは「天に昇る(=  
 死ぬ)」ことを意味する。本来的には異教的世界観を反映した表現だと思われるが、  
 ここではこれがキリスト教的な文脈に应用されている。

<sup>7</sup> このウィルフリドゥスはヨーク司教 *St Wilfrid I* (d. 709) のことで、直後に言  
 及されるウィルフリドゥスとは別人。

<sup>8</sup> *PL* では、この行とこれに続く3行で、以下の様に述べられている。「天使た

Uilfridus et ternis superam penetrauit in aulam,  
 Tempore posterior, morum non flore secundus. 25  
 Iacobus seruus<sup>10</sup> domini pius atque Philippus  
 Mirifico Maias uenerantur honore kalendas.<sup>11</sup>  
 Bis binis sequitur Pancratius Idibus insons  
 Ter quinis Marcus meruit pausare<sup>12</sup> kalendis.  
 Iunius in nonis mundo<sup>13</sup> miratur ademtam 30  
 Et summis Tatberhti<sup>14</sup> animam trans sidera uectam<sup>15</sup>.  
 Atque die uincens eandem Bonifatius hostes  
 Martyrio fortis bellator ad astra recessit.<sup>16</sup>  
 Inque suis quadris Barnaban idibus aequat.  
 Gerbasius denis patitur ternisque kalendis 35  
 Protasius simul in regnumque perenne uocati.  
 Estque<sup>17</sup> Iohannes bis quadris baptista colendus<sup>18</sup>,  
 Natalis pulchre feste plaudente corona.  
 Martyrio et Paulus senis<sup>19</sup> ouat atque Iohannes.

---

<sup>10</sup> *PL* frater

<sup>11</sup> *PL* ではこの次に以下の一行が続く。Sanctus et antistes Nonas uolat alma  
Joannes

<sup>12</sup> *PL* pulsare

<sup>13</sup> *PL* in mundo Nonis

<sup>14</sup> *PL* Lantberti

<sup>15</sup> *PL* uerti

<sup>16</sup> Bonifatius に関するこの二行は *PL* には欠けている。

<sup>17</sup> *PL* Et

<sup>18</sup> *PL* Kalendis

<sup>19</sup> *PL* lenis

そして、二十九日には、より後の時代に、徳の高さでは少しも引けを取らぬ  
 ウィルフリドゥスが、(天の) 王宮に達した。<sup>9</sup> 25  
 神の僕にして敬虔なるヤコブスとフィリプスは、  
 五月一日に、大変な榮譽により崇敬される。<sup>10</sup>  
 十二日には、罪なきパンクラティウスが続き、  
 十八日には、マルクスが永遠の眠りについた。  
 六月は、五日に、この世から奪われ、 30  
 天空を越えて高みに運ばれていった、タートベルフトゥスの魂を崇敬する。  
 そして、敵を打ち負かす屈強な戦士ポニファティウスは、  
 丁度同じ日に、殉教により、天の高みへと去って行った。  
 十日にはまた、(六月は) バルナバスを (他の聖人たちと) 同様に扱う。<sup>11</sup>  
 ゲルバシウスは十九日に殉教し、 35  
 プロタシウスも同時に (天の) 王国に永遠に召喚された。  
 そして、二十四日には、洗礼者ヨハネスの美しき誕生の祝日が  
 歡喜する人々により祝われるべきである。  
 殉教故に、二十六日には、パウルス、そしてヨハネスが歡喜す。

---

ちの群れにより、天の頂きへと運ばれた。二十五日には、世界に大祈願祭が輝く。  
 二十七日には、恵み深く尊重されるべき教会への奉獻が、聖人たちとキリストに  
 対する俗世における等しい称賛を促す。」

<sup>9</sup> このウィルフリドゥスは、ヨークの司教 Wilfrid II (在位 ?714-32年) のこと。もう一人のウィルフリドゥスよりも没年が後であるということが、*tempore posterior* 「より後の時代に」という句で表されている。

<sup>10</sup> *PL* ではこの後に、「七日には、聖人にして司教のヨアネスが、恵みの中へ飛びたつ」という一行が続く。

<sup>11</sup> 主語は言い表されていないが、*suis quadris … idibus* 「その(月の) *idus* から四日前に」とあり、*suis* 「その」によって指示されている六月が主語と考えられる。

Doctores Petrus et <sup>20</sup> Paulus ternis sociantur <sup>21</sup> ,	40
Maxima quos palma clarat sibi lumina mundus. <sup>22</sup>	
Iulius in quadris bis gaudet ferre kalendis	
Iacobum fratremque Iohannis more colendum <sup>23</sup>	
Sanctificant Abdo et Sennis ternos uenerando. <sup>24</sup>	
Augustus <sup>25</sup> Xystum octauis tenet idibus aptum <sup>26</sup> .	45
Bis binis <sup>27</sup> uictor superat Laurentius hostes.	
Sancta dei genetrix senas ter constat adire	
Angelicos uecta inter coetus uirgo Kalendas. <sup>28</sup>	
Octonos sanctus sortitur Bartholomeus	
Bis binis passus colitur baptista Iohannes.	50
Idus Septembris senas dedicabat honore	
Quis meruit nasci felix iam uirgo Maria	

---

<sup>20</sup> *PL* simul et

<sup>21</sup> *PL* servantur

<sup>22</sup> *PL* では以下の一行が続く。Martini in quartas Nonas Dedicatio fulget.

<sup>23</sup> *PL* では以下の一行が続く。Samsonem quintas celebramus ab orbe Kalendas,

<sup>24</sup> *PL* では以下の一行が続く。Machabæi Augusti coronantur mensis in ortu:

<sup>25</sup> *PL* Sanctumque et

<sup>26</sup> *PL* almum

<sup>27</sup> *PL* senis

<sup>28</sup> *PL* では以下の二行が続く。Inde Timotheus undecimas tenet ordine digno, /  
Atque simul martyr sortitur Symphorianus

ベトルスとパウルス、二人の師は二十九日に関連付けられる。 40

人々は、最大の栄誉により、光り輝く彼らを称える。<sup>12</sup>

七月は、二十五日に、ヨハネスの兄弟で、

その徳故に崇敬されるべきヤコブスを、喜んで称賛し、<sup>13</sup>

三十日には、尊敬すべきアブドンとセネスが聖なるものとされる。<sup>14</sup>

八月は、六日に、囚われの身のクシストゥスを（祝うべき聖人として）持つ。<sup>15</sup>

十日には、勝利者ラウレンティウスが敵たちを打ち負かす。

聖なる神の母（マリア）は、かの乙女は、十五日に

天使の群れの中に運ばれたとされる。<sup>16</sup>

聖バルトロメウスは二十五日を（祝日として）持つ。

二十九日には、難を受けた洗礼者ヨハネスが敬われる。<sup>17</sup> 50

実り豊かな乙女マリアは、栄誉により、生を受けた

九月八日を、聖なるものとした。

<sup>12</sup> *PL* ではこの後に「(七月) 四日には、マルティヌスの(聖遺物の) 移転が際立つ」という一行が続く。聖マルティヌスの祝日は11月11日だが、聖遺物の移転が行われた7月4日も祝日とされていた。

<sup>13</sup> *PL* ではこの後に、「二十八日に、我々は全世界で、サムソンを記念する」という一行が続く。

<sup>14</sup> *PL* ではこの後に、「八月はその始まりにおいて、マカベウスによって飾られる」という一行が続く。

<sup>15</sup> このクシストゥス(Xystus)とは、ローマ皇帝ワレリアヌスの迫害に遭い殉教した、教皇シクストゥス2世(在位257-58年)のこと。

<sup>16</sup> 「天使の群れの中へ運ばれた」という言葉に仄めかされているように、聖母被昇天の祝日(Assumptio sanctae Mariae)のことが述べられている。*PL* ではこの後に、次の二行が続く。「続いて、ティモテウスは、その地位にふさわしく、二十二日を(祝日として)持つ。また、同時に、殉教者シンフォリアヌスも(祝日)持つ。」

<sup>17</sup> 「難を受けた」(passus)という言葉に仄めかされているように、洗礼者ヨハネ斬首の記念日(Decollatio sancti Iohannis baptistae)のことが述べられている。

Octauas decimas Cornelius inde kalendas  
 Consecrat, et Cyprianus simul ordine digno.  
 Eufemia ac<sup>29</sup> sex decimas tenet intemerata. 55  
 Undecimas capit et<sup>30</sup> Matheus doctor amoenus,  
 Mauricius decimas tenet<sup>31</sup> martyr cum milibus una.  
 Quintanas<sup>32</sup> sortitur Cosmas sibi cum Damiano.  
 Michahelis ternas templi dedicatio sacrat.  
 Atque bonus pridias micat interpret Hieronymus. 60

Sextas octembris nonas Bosa optat habere  
 Sollemnis terris summo qui gaudet Olympo.  
 At<sup>33</sup> gemini quinis Haeuualdi sorte coluntur.  
 Paulinus senas metet<sup>34</sup> idus iure magister.  
 Doctor ter quinis Lucas succurrere kalendis. 65  
 Simonis quinis et Iudae uota feramus.

---

29 *PL* et

30 *PL* at

31 *tenet* is lacking in *PL*.

32 *PL* Quinas

33 *PL* Et

34 *PL* tenet

コルネリウスが、それから、また同時に、キブリアヌスも、  
相応しくも相前後して、十四日を聖なるものとする。

そして、汚れなきエフェミアは、十六日を（祝日として）持つ。 55

また、愛すべきマテアス師は、二十一日を（祝日として）持つ。

何千人もと共に殉教したマウリキウスは、二十二日を（祝日として）持つ。<sup>18</sup>

コスマスはダミアヌスと共に、二十七日を（祝日として）手に入れる。

ミカヘリスの神殿への奉献は、二十九日を聖なるものとする。

そして、良き（聖書）翻訳者ヒエロニムスは（十月一日の）前日に光り輝く。

60

オリュポス山の頂にて喜びの裡にあるボサは、

各地において、十月二日が厳粛であることを望む。

これに対し、双子のヘワルドゥスは、定めにより、三日に崇敬される。

法による指導者パウリヌスは、<sup>19</sup> 十日を（祝日として）持つ。

十八日には、師ルカスが（我らにとっての）救いとなるだろう。 65

二十八日に、我らはシモニスとユダの誓約を称える。<sup>20</sup>

---

18 聖マウリキウスは、キリスト教徒に攻撃を加えるよう命じたローマ皇帝マクシミアヌス（Marcus Aurelius Valerius Maximianus Herculeus Augustus, 在位 286-305 年）の命令に従わなかったために、自らの率いるレギオンの 6666 人と共に処刑されたという伝説がある。アングロ・サクソン時代のカレンダーにも、9 月 22 日の欄に、「聖マウリキウスおよび彼の 6666 人の仲間達」と書かれているものが複数残されている。例えば、BL, Additional MS 37517, fol. 3 の該当箇所には、Sancti Mauricii cum sociis suis. vi milibus. DC . LXVI と記されている。ここで述べられている、「何千人もと共に殉教した」とは、このことを念頭に置いたものである。

19 パウリヌスは、601 年にグレゴリウス 1 世により、キリスト教化促進のためにイングランドに送られ、後にヨークの初代司教に任じられた。「法による指導者」という言葉は、このようなことを念頭に置いたものであろう。

20 Simon と Jude には共に Zelotes 「熱狂者」というニックネームが付けられており、信仰に厚くキリストに特に忠実な使徒として捉えられることがあった。「彼らの誓約を称える」という言葉も、彼らのこのような性質を踏まえたものであろう。

Multiplici rutilet gemma ceu in fronte Nouember,  
 Cunctorum fulget sanctorum laude decorus.  
 Martinus ternis scandit super idibus astra.  
 Quindecimus uitam finiuit Tecla kalendis. 70  
 Caecilia astra<sup>35</sup> merito decimis cum laude migravit.  
 Clementis laeti ueneramur festa nouenis.  
 Octauis Crysogonus ouat uitalibus armis<sup>36</sup>.  
 Andreas pridias iuste ueneratur ab orbe.  
 Ter decimas adit iam<sup>37</sup> Ignatius aequae kalendis. 75  
 Bis senis caelum coepit conscendere Thomas  
 Octauis Dominus natus<sup>38</sup> de uirgine casta.  
 Martyrio Stephanus septenis alma petiuit,  
 Bis ternis euangelicus scriptor penetrauit  
 Angelico uectus tutamine uirgo Iohannes. 80  
 Martyrio tenera prostrantur milia quinis.  
 Siluestrem pridias celebramus ab orbe uerendum<sup>39</sup>.

---

<sup>35</sup> *astra* is lacking in *PL*.

<sup>36</sup> *PL* arvis

<sup>37</sup> *PL* Daciani

<sup>38</sup> *PL* natus Dominus

<sup>39</sup> *PL* colendum

ちょうど宝石が赤く光るように、十一月はその初めにおいて、  
全ての聖人たちへの幾重にも重なる称賛により輝くのが相応しい。

マルティヌスは十一日に天上へと昇る。

十七日には、テクラが人生を終えた。

70

カエキリアは、正当にも、二十二日に、称賛と共に天へと去った。

二十三日に、我々は、心嬉しく、クレメンスの祝祭に敬意を表する。

二十四日には、クリソゴヌスが、生ある者達の軍勢と共に歓喜する。

アンドレアスは、(十一月の)前日に、正当にも、世界中で崇敬される。

同様に、十二月二十日には、イグナティウス(の祝日)がやって来る。 75

二十一日には、トマスが天に昇った。

二十五日には、主が純潔な乙女よりお生まれになった。

殉教を通じ、ステファヌスは、二十六日に、恵みを求め、

二十七日には、福音書記者にして清らかなるヨハネスが

天使の庇護により運ばれて(天に)達した。

80

二十八日には、何千もの子供たちが打ち倒され殉教した。<sup>21</sup>

(一月一日の)前日に、我々は世界中で、尊敬すべきシルベステルを称賛する。

---

21 「マタイによる福音書」2.16-18に述べられた、ヘロデ王による男児虐殺に由来する、罪なき嬰兒殉教の日(Passio sanctorum innocentium)のことが述べられている。これにより殺された子供たちは、キリスト教史上最初の殉教者とみなされる。実際に殺害された数は不明だが、アングロ・サクソン時代のカレンダーには、これを144,000人としているものが複数ある。例えば、Salisbury MS 150, fol. 8bのカレンダーの該当箇所には、Sanctorum . cxliiii . milia innocentium . と記されている。MCYでは、恐らく韻律等の制約のため milia「何千もの」とだけ述べられ、具体的な数字は示されていない。

\* 本研究は科研費(22720113)の助成を受けたものである。